

2011/09/06

アラスカツアーレポート

2011年8月28日から9月4日までの8日間、私は8名のお客様と北米大陸のアラスカに行ってきました。

圧倒的大自然に包まれた、8日間のレポートをします。

8月28日（日）午後4時

まだ夏の暑さが残る成田空港を、私達9人を乗せた飛行機は定刻どおりに出発しました。現在、日本からアラスカへの国際線は、直行便の就航が無く、一部で運行されるチャーター便を除くと、アメリカ西海岸の都市に一度入国し、国内線に乗り換えるか、カナダのバンクーバー経由で、アンカレッジかフェアバンクスに入るのが一般的ルートです。

今回私達は、アメリカのシアトルに入国し、その後国内線でアンカレッジを目指しました。シアトル国際空港は巨大な空港なうえに、最近アメリカの入国審査は非常に厳しく時間がかかるので、今回の飛行機では乗り継ぎ時間に余裕が無かったため、国内線の搭乗ゲートに全員がそろったのは、出発10分前のギリギリでした。

シアトルからは、カナダ国境を超え、太平洋沿岸を北西に向かって飛行しますが、窓から見える真っ白な山々と、その間に広がる無数の氷河は、これから始まるアラスカでの体験に向けて胸が躍るものでした。

そしてアンカレッジ到着直前には、これもまた真っ白に冠雪し、神々しいまでに白く輝くマッキンリー山も見る事が出来、これから始まる旅に、心が上にも気分が高揚してきました。



飛行機の窓から見えた真っ白なマッキンリー山

現地時間の午後1時30分、定刻どおりアンカレッジに到着しました。

飛行機を降りた瞬間に体を包んだ、乾いてヒンヤリした空気が、北の大地に降り立ったことを実感させてくれました。前日までは数日雨が続き、久しぶりに“アラスカ晴れ”になったというアンカレッジは、奥志賀の10月くらいの気温で、ジッとしているには肌寒いくらいですが、日差しが眩しいほど強く、高緯度にいることを思い出しました。

現地ガイドのセイファートさん（アラスカ在住の日本人女性）と合流し、車でダウンタウンにあるホテルに向かいチェックインをしました。その後短い時間ではありましたが、お客様皆様、歩いてダウンタウンを回りました。



マウントクック像とはるか彼方にマッキンリー

私は、前回アンカレッジに滞在した時の記憶をたどり、キャプテンクックの銅像が建ち、マッキンリー山を望むことが出来る、海岸線を散歩しました。

サマータイムになっているせいもありますが、夕方いつまでも日が高く明るいため、ついつい時間を忘れてしまいましたが、気が付くとすっかり夕方になっていること

に驚きました。10時くらいまで明るく、本当に闇になるのが11時過ぎという、この高緯度独特の時間の進みは、いつまでたっても昼間が続いているような状態で、頭がボンヤリしてしまい、私としては最後まで馴染むことが出来ませんでした。

夕食は、ホテルのレストランで、皆さんといただきました。メインは半分も食べることが出来ないところに、子供の頭ほどあるような巨大デザートに、お客様皆様もアメリカの食文化の洗礼を受けたようです。

お腹が一杯になったのと時差のせいで、さすがに眠くなりました。

丸一日ほどかかった移動で、長い長い一日が終わりました。

8月29日

体は十分に疲れているのに、時差のためか夜中に何度も目が覚めてしまう苦痛に悩みながら起床し朝食をとりました。



アラスカ鉄道

この日はアラスカ鉄道に乗って北上し、マッキンリー山の登山基地の街タルキートナを目指します。

ホテルから迎えの車に乗り、10分ほどのアンカレッジ駅に向かいました。荷物は別の貨車に載せられるため、空港のようなチェックインをし、客車に乗り込みました。

日本の改札口や、ホームのようなものはなく、目の前の線路に、黄色と青色

あのアラスカカラーで塗装されたアラスカ鉄道が静かに停まっているだけです。一応指定席なので、自分の号車と席をさがし落ち着きました。出発は8時15分のはずでしたが、数分遅れて、何の合図もアナウンスもないまま、列車は静かに動き出しました。

車内では、天気良かったせいか、頻りに車窓からの案内などが放送されていたり、スタッフは、パンフレットを配ってくれたり、色々声をかけてくれました。

タルキートナまでは3時間の乗車時間ですが、私達は展望車に行って、景色を楽しみ写真を撮ったり、食堂車に行って、ビールやお茶を飲んだりして楽しんでいたため、振り返ってみると、自分の席には三分の一も座っていなかったように思います。

そんな訳で、退屈する間もなくタルキートナ駅に到着、迎いの車に乗り、スイス人の経営するロッジ「スイスアラスカイン」に向かいました。“三つの川が合流するところ”という名前のこの街は、マッキンリー山の登山基地で、あの植村直己さんの最後の登山もこの町をベースに行われました。植村さんは現地では英雄の一人で、街の中に小さな記念館もあります。

少しの時間、ロッジの周辺の森を歩いたのですが、ちょうど奥志賀と同じく、綿毛になっ



2メートル以上はあり、見上げるほどのヤナギラン

ているヤナギランが、私の背丈以上もあったり、真っ赤な実をつけたナナカマドが私の感覚にはないほど、高木になっていたり、同じ種でも遠い祖先で分かれて、独自に進化しながら、その土地土地に根付いて行くと、こういうことになるのだと感じました。

ロッジで昼食後、あまりの天気の良いに、ガイドのセイファートさんが、

「マッキンリーまでの遊覧飛行が素晴らしいですよ！」

と案内してくれたので、希望者を募り遊覧飛行に出かけました。

残念ながら、私は座席が一杯で予約が出来ませんでした。お出かけになった皆さんは、間近に見るマッキンリー山とその周りの氷河に感動された様子でした。

ロッジに帰り、夕食までの時間をバーカウンターで、ビールやお茶を飲んで過ごしました。夕食時ロッジのオーナーが、昨夜は良く晴れて、オーロラが良く見えたとの情報に、皆さんの期待が一気に膨らみました。

この晩は、もしオーロラが出たら必ず皆さんで声をかけましょうと示し合わせ、休むことにしました。私は結局1時ごろまで、部屋から出たり入ったりを繰り返していましたが、残念ながらオーロラを確認することは出来ませんでした。

それでも満点の星空を見ることが出来ました。普段日本で見慣れた星座と、勿論配列は同じですが、北極星がほぼ頭上にあることに、再度自分が極北の地にいることを思い知らされました。また高さのせいも、日本で見ると以上に、大熊座の北斗七星が大きくハッキリ見え、圧倒的存在感があり、アラスカの州旗になっていることも頷ける思いでした。

8月30日

昨日の快晴から一転、小雨まじりの朝になりました。

ロッジで朝食を済ませ、迎えの車で北上し、途中にあるリトルコールクリーク周辺のハイキングコースをハイキングしたあと、いよいよデナリ国立公園に向かうのがこの日の予定です。

車で走り始めると、いよいよ周囲は、アラスカらしい風景が延々と広がり始めます。

アラスカの自然に興味を持った日本人は、興味を掘り下げていく過程で、大抵二人の大先達に出会うこととなります。一人は冒険家の植村直己さん、もう一人は写真家で作家でもある星野道夫さんです。二人とも、最後は極北の地で命を落とすのですが、今自分が見ている同じ景色を、きっと二人も見たのだと思うと、独特な感慨が胸にこみあげました。

既に紅葉が真っ盛りのハイウェイを、1時間半ほど北上し、リトルクリークのハイキングコースに入りました。今回の旅で、本格的歩きはこれが最初です。

ワクワクする期待を抑えながら、針葉樹の中に白樺、ダケカンバの混じる森のトレールに入りました。森の第一印象は、植物相が日本で見るとあまり違和感がないことでした。多少葉の形が違っていたり、大きさが見慣れたものより、大きかったり小さかったりはありますが、どこか日本の森にいるような安心感がありました。北米大陸が、最終氷河期までは、我々日本列島とも地続きだったことを思い出す瞬間でもありました。

途中ビーバーが作ったダムを見ながら、ゆるい坂を登っていくと、急に視界が開けて周囲の展望が利くようになりました。私達が通ってきた道路がはるか彼方に一本だけ見えるほかは、見渡す限り人工物が一切ない広大さに圧倒されながら、

「これは、やっぱり道路よりも空路の方が発達するわけだね」



近代土木技術も真っ青、ビーバーのダム

と納得していました。

トレールそのものは、その先も延々と続くのですが、やや霧雨のような空模様だったことと展望も十分に楽しめたので、私達はここで引き返すことにして、もと来た道を駐車場まで歩きました。

そのあとは車でデナリ国立公園に向かいました。紅葉したブルーベリーの灌木が、どこまでも延々とピンク色に染まる大地の中、真っ直ぐな道がデナリ公園の入り口まで続いていました。

ネナナ川のほとりに立つ、ログハウス風のロッジ「デナリリバーキャビン」にチェックインし、一杯に広げた私の手のひらほどもあるステーキの夕食をとりました。この日も晴れてさえいれば、オーロラへのひそかな期待をしていたのですが、全面雲に覆われた空が、その期待はとて無理だということを物語っていたので、心置きなく眠ることにしました。

8月31日

この日は、いよいよデナリ公園の特別保護地域に入ります。

ゆっくりと朝食をとり、公園内のシャトルバスに乗り、まずは公園入り口にあるビジターセンターに向かいました。広さも展示内容も充実したセンター内を、やや急ぎ足で見学したあと、少し歩いたところにある“滑走路”に向かいました。

地図も含め、各種案内にはエアポートのマークがあるので、いくら小さくとも何か建物はあるだろうと予想していたので、飛行機の手前にいたスタッフに

「オフィスはどこ？」

と訪ねると、指で足元を指しながら

「Here！」

という返事でした。

このおおらかさに、アメリカ文化初心者の私も、“いいね～、このノリ”とニヤニヤしてしまいました。いくつかのインフォメーションを聞き、6人乗りの小型飛行機2機に分乗しました。シートベルトを締めたとおもったら、間髪いれずにエンジンを始動し、そのまま滑走路に走り出し、あっという間に飛び立ってしまいました。

幸運にも操縦席の隣に座っていた私は再び、“いいね～、このノリ”と思っていたのですが、数分後眼下に広がる、紅葉した大地に息をのんでしまいました。

しばらく呆然と眺めていましたが、



デナリ公園の中はこの軽飛行機で

思い出しカメラをポケットから取り出して、何枚もシャッターをきりました。15分ほど飛行すると、前方に山頂部分が雲に覆われたマッキンリー山が迫ってきました。こうした飛行はこれが通常なのでしょうが、私達にマッキンリー山や、その麓の氷河を見せるために、数回大きな8の字を描くように飛行したあと、小型機は一気に高度をさげ、カンティシュナに着陸しました。地面をならし砂利をひいただけの滑走路に、それは見事にランディングさせる彼らの（そう、私の乗った飛行機のパイロットは若い女性で、とてもカッコよかったです）操縦技術にも驚きました。

カンティシュナは、デナリ国立公園に一本だけある自動車道路の終点で、通常人が入ることの出来る最奥端にあたる場所です。無限とも思える広がりの中に、数件のロッジが点在するだけです。いつの間にか雲が低くなり、日差しが全く届かなくなったため、やや寒さを感じるほどになりました。お客様にウェアの調整をお願いし、私もニット帽子と手袋



どこまでも見渡す限りのデナリ国立公園

をしました。

日本の初冬のような景色と空気の中に佇みながら、あの植村直己さんや、星野道夫さんは今自分が見ている景色と同じ景色を見て一体どんなことを感じたのだろうと想像しました。

持ってきたサンドイッチのランチをすませ少し休憩をしたあと、今度はバスに乗り込み、公園の出口に向

かっての移動を始めました。特別保護地域のほぼ端から端までを移動する、ワイルドライフサファリドライブの始まりです。一定の距離をおいて、ビジターセンターとトイレがあるので、バスは3回ほど立ち寄りながら走ります。途中の車窓からは、カリブーとムースを見ることが出来ました。またドールシープの群れが道路を横切っていたため、バスはそこでしばらく停車をしました。さらに、私には遠すぎて特定は出来ませんでした。上空には驚の仲間が飛んでいるのも何度か見ることが出来ました。いくつ谷を越え、いくつ尾根を越えてもまた同じような景色が延々と続く、デナリの広さには、ただただ圧倒されっぱなしでした。

約4時間をかけて、バスが公園入り口のビジターセンターに到着したのは、既に午後6時になっていました。

シャトルバスでロッジに戻る頃には、なかなか傾かない太陽もすっかり西に傾き、夕方の帳が降りはじめていました。

夕食は、これまた特大のサーモンの夕食を食べました。

この日の夜は、前日までよりも暗くなるのが早く感じたのは、上空が雲に覆われたせいだ

けでなく、時差が修正されたうえ、これまでの疲れで眠気があったためでしょうか。アラスカに来て初めて、朝まで一度も目が覚めることなく熟睡しました。

9月1日

この日も朝食をゆっくりとった後、前日と同じくシャトルバスでビジターセンターまで向かい、そこからホースシューレイクまでのハイキングをしました。公園入り口近くにあるこのトレールは、気軽に歩けるちょうど良い散歩道のような所です。目的地のホースシューレイクはもともと池があったところ

ですが、ビーバーがいくつもダムを作っています、そのダムや巣、はたまた建築中の現場を見ることが出来ます。直径が30センチはあろう立ち木を、歯だけで削り倒してしまうのですから、その歯の強さには驚きます。現代人にもビーバーの歯のDNAが入っていたら、どんなに助かったことでしょうか。



軽いハイキングを終えてビジターセンターまで戻り、少し休憩をし、またシャトルバスでロッジに戻りました。

ビーバーが、直径30センチはある木を切り倒そうとしているところ

一昨日、ここに来たときよりも明らかに紅葉が進んでいる木々の下のテラスで昼食をすませ、迎えのバスに乗り込みロッジを出発しました。

デナリ公園をあとにした私達は、今回の最終目的地でもあり、別名“オーロラシティ”と呼ばれるフェアバンクスを目指しました。

途中ネナナという街で一度休憩をし、午後4時、フェアバンクス市内のダウンタウンにある、ブリッジウォーターホテルにチェックインしました。

ダウンタウンは端から端まで歩いていける程度ですので、お客様皆さんも残り少なくなったアラスカを惜しむように、積極的に街に出て買い物や散歩を楽しんでおられたようです。私はたまたま見つけたスポーツ用品店に入ってみました。これから冬に向かう現地では、冬物セールのようなものもやっていました。日本でもお馴染みのアメリカブランドのウェアなどが、円高のせいもあってか

「エッ、これ安いなあ」「買っちゃおうかな」

という感じでした。日本で大体15,000円前後くらいに思っているものが、おおよその計算で、8,000円とか9,000円といった感じです。かなり衝動にかられましたが、荷物が多くなるからと自分に言いきかせ、ポケットから財布を出すのをジッとこらえました。

この日の夕食は、ホテルの隣のイタリアレストランでとりました。とても美味しいのですが、こちらも量が多く、これまでほぼ完食をしていた私も、デザートは食べることが出

来ませんでした。お客様皆様もほとんど半分以上残してしまい、さすがにこれはちょっともったいないなと少し複雑な思いでした。

当初この夜は、オーロラツアーを予定していたのですが、天候が悪そうだったため、明日に疲れをのこさないためにと、昼過ぎにキャンセルをしていました。ところが夕食が終わってみると、ほぼ快晴の空に、ガイドのセイファートさんが、

「これならオーロラ見えるかも知れませんね。もう一度聞いてみましょうか？」

と気転を利かせてくれたので、早速頼んでみると OK とのこと。

急遽オーロラツアーに出かけることにしました。一旦は諦めかけていたオーロラでしたが、俄然期待が出てきました。

10時半にホテルで待っていると、車が迎えに来てくれました。今回お願いしたのは、日本人の熊谷さん夫妻が現地の友人と共同経営するロッジです。車で30分ほど走った高台にあるそのロッジは、ログキャビン製でオーロラ観察用に色々と考えられた建物です。北の方角がほぼ全面ガラスになっているロッジで、いくつかの説明を聞いてからは、オーロラが出てくれることを願いながら、お茶やお酒を飲んで待ちました。

すると1時間もしないうちに、ロッジの熊谷さんが

「アッ、もう出始めていますね」

の声に全員で外のウッドデッキに飛び出しました。

地平先から少し上の辺りに、何かボンヤリする明かりが見えます。この段階では、初心者の私達にとっては、教えてもらわないと見逃してしまうようなものでした。

早速、写真を撮ったり、光が出始めたあたりをジッと眺めていると、ドンドンとその明かりが強さを増しながら、大きく広がって行くではありませんか！

もうこうなると、誰が見ても「あれ、オーロラだ！」という感じです。

ついに見ることが出来ました、本物のオーロラ！

よく観察していると、オーロラは一瞬たりとも止まっていることがなく、その形や明るさをドンドン変化させていきます。最終的にこの晩私達が見たオーロラは、見ている方角のほぼ端から端までの広さに、高さは頭上から半分くらいまでの高さで、カーテン状の幕をたらしめたような、緑色のものでした。

途中何回も、熊谷さんが写真を撮ってくれました。この写真は希望すれば購入



ついにオーロラ初体験！もう言葉を失う神秘の世界

することができるものですが、お客様皆様購入されていました。

2時過ぎまでオーロラを堪能し、その後またホテルまで車で送ってもらいました。

深夜までの行動で、長い一日となりましたが、初めてみたオーロラの興奮がなかなかやまない夜となりました。

9月2日

よく晴れました。いよいよアラスカでの行動最終日。

昨日のオーロラツアーからほんの数時間しか休めていないのですが、皆様元気に起きて下さったのは、やはりオーロラがくれたパワーのせいでしょうか。

朝食後、迎えのバスで、まずは市内のビジターセンターに寄りました。

昨年新しくオープンしたばかりというこの施設は、大きな展示室に、内容も充実していて、キッチンと見たらとても半日では回りきれない規模でした。時間があまりなかったので、サッと通り過ぎてしまったのは少し残念でした。そのあと、お客様のご希望もあり、郊外の巨大スーパーに立ち寄りました。最近、日本の地方都市にも、必ず巨大商業施設がありますが、ここもアメリカらしいスケールでした。そして、ほとんどの食料品なども、私には考えられない巨大さで

「生まれたときからこんなもの食べてたらそうなるよね」

と、周囲のこれまた縦横巨大な現地の人たちを見ながら思いました。

そのあと、バスに乗り込み、市内から北東へ 100 キロほどのところにある、チナホットスプリングスを目指しました。

私達はまず、施設の少し手前にある、エンジェルロックまでのハインキングを楽しみました。ダケカンバを中心とした森の中を出発して、山を登っていくと、花崗岩の奇岩がいくつも天をついてそびえ立つ、独特な景観をみることが出来ます。エンジェルロックが近付くと、きつい登りになり、皆さん汗をかきながら登りました。岩の近くまで行くと、展望が一気に開け、よく晴れた青空のもの、紅葉真っ盛りの大がどこまでも続いている景色が広がりました。



エンジェルロック

汗をかいた体には、乾いた風も気持ちよく、ゆっくり休憩をして、写真を撮った私達は、もと来た道を帰りました。途中、何組ものハイカーとすれ違いましたが、ここまで来た道の交通量から比べると、歩いている人がかなり多いのではないかと感じました。やはりこ

のような場所に来る人たちは、もともと自然や体を動かすことが大好きな人たちばかりなのだと思います。

少し汗をかき、心地良い疲労に包まれた私達は、その後バスで10分ほどのチナヒットスプリングスに到着しました。

ここはゴールドラッシュの時に見つかった温泉で、周囲に何も無いこともあり、現在はオーロラ観察施設として人気を集めています。

温泉とオーロラという組み合わせで、日本人ツアー客にも人気のスポットでもあり、そのせいか日本人スタッフも数人働いていて、こんな北のまるで地のはてのようなところで、日本人に会えた感動と安心感がありました。



チナホットスプリングスの巨大岩風呂

ここでは温泉に入ったり、散歩をしたり、カフェでくつろいだり、それぞれに過ごしました。

私は早速、名物の“温泉”に行きました。プールやジャグジーも併設されているのですが、何といても最大の目玉は、日本風にいうと“露天岩風呂”の巨大な温泉です。プールのような広さに、私が立って胸の高さくらいまでの水深(?)に、私達と彼らの“温泉文化”の違いを感じました。お湯の温度はかなり暖かく、とても気持ちよいのですが、常に立っていなくてはならない、落ち着かなさに、さすがに私もそう長居は出来ませんでした。

気持ちよく温泉につかった後は、お客様皆様とアイスミュージアムに行きました。この施設は、いわば巨大な冷蔵庫のようなもので、中が全て氷で出来ているという芸術的というかメルヘンチックというか、とにかくなんともアメリカらしい物好きな施設です。

よくテレビなどでも紹介されているので、そうしたもので一度はご覧になっている方も多いはずですが。そういえば、数年前まで、どこかの国にも、大都市の真中に強大な冷蔵庫を作ってスキー場にしていた、これま



アイスミュージアム内部

た実に“物好き”な施設があったことを思い出しました。

ミュージアムの中にはホテルもあり、600ドルで予約すると、本当に泊まることが出来るという、まさにまさに“物好き”なことをとってしまう施設です。まあ、そんなミュージアムの中にあるバーカウンターで、勧められるままに、氷で出来たグラスでカクテルを飲み、気温は氷点下なのに、内蔵が燃えるようになり、頭もクラクラしながら楽しんでいた私も相当に物好きでしたが。

そのあとは、このチナホットスプリングス内のレストランで、アラスカでの最後となる夕食をとりました。アラスカでの最後の夕食はハリバット（オヒョウ）でした。この夕食は、全体としてこれまでのアメリカンサイズに比べると、かなり私達には親近感を覚える量でした。これは、このレストランは日本人ツアー客が多いせいなのかなとも思うと同時に、ここはフェアバンクスからも遠く離れた遠隔地で、アメリカとはいえ、そう簡単に食べ物などは無駄に出来ないから、必然的にそうなるのではないかと感じました。

アラスカでの最後の夕食は、ゆっくりと流れる時間でした。

美味しい魚料理と、白ワインでお腹一杯になった私達は、少し休憩したあと、またバスに乗り込み、チナホットスプリングスをあとにし、フェアバンクスに向かいました。

満腹感と、ほろ酔いで、帰りの車では、私も半分くらい眠ってしまいました。

途中フェアバンクスの郊外にある、あの“アラスカパイプライン”を見学しました。

ご存知の方も多いはずですが、このパイプラインの「パイプ」は日本製です。まさに日本経済がとどまることを知らない勢いを持っていた時代、城山三郎の小説に登場するような優秀な営業マンと技術者達が、沢山このプロジェクトに携わったのだなど、既に歴史の一部になる“現役の産業遺産”を、手で軽くたたきながら思いました。（勿論 BGM は中島みゆきさんです）

ホテルについたのは、北の大地のながいながい一日も、さすがにくれようとしている頃でした。部屋にもどり、使い終わったウォーキングシューズやザックをパッキングし、ベッドに横になったのは、12時になっていました。

予定していた行程と、プログラムはすべて終了できた安堵感が、私を心地良い眠りに誘ってくれました。こうして長かったアラスカでの旅も終演に近づきました。



果てしなく続く針葉樹の森

9月3日

早朝、まだ真っ暗な4時前に起きて出発準備。

昨日は帰りも遅かったのも、皆さんもあまり睡眠時間はとれなかったはずですが、元気に集合して下さいました。4時15分にホテルを出発し空港に向かいました。

まだ明けきらない朝のフェアバンクス国際空港に着き、チェックインを済ませました。6日間私達に同行してくれた、現地ガイドのセイファートさんとはここでお別れです。彼女の手助けのおかげでここまで旅も順調に進めることが出来ました。心より感謝です。

国際空港とはいえ、こじんまりした空港は、早朝のせいもあってあまり人も多くなく、静かでした。出国やセキュリティーのチェックは、行列もなく実にあっさりでした。

特に出国審査は、入国の時、あれほど厳しくチェックを受けたのに比べると、パスポートを開いてチラッと見るだけで、拍子抜けするほどでした。アメリカという国の抱える課題と、彼らの合理主義、個人主義を垣間見る思いでした。

少し待って飛行機は出発、3時間ほどで、定刻どおりにシアトル国際空港に着きました。つい先ほどの、のどかなフェアバンクス空港に比べると、シアトルはさすがに巨大で人もごった返していて、

「嗚呼、あの大自然の真只中から、また人間の生活圏に戻ってきたんだなあ」

と感じる瞬間でもありました。

来たときに比べて、今回は乗り継ぎ時間に余裕があったので、早朝からほとんど何も口にしていなかった私達は、それぞれ空港内のレストランで食事をしたり、買い物などをして、アメリカでの最後の時間を過ごしました。

現地時間の午後1時30分、ほぼ定刻どおりに飛行機はシアトル国際空港を飛び立ちました。西にむかう飛行機は、9時間ずっと明るい中を飛び続けましたが、私は半分くらいとうとうしていました。

そして日本の9月4日午後4時、日曜日の夕方とあって、なかなか過密な成田空港に飛行機は到着しました。離陸前、日本列島に大きな台風が来ているという情報で、少し心配していたのですが、ほぼ定刻どおりに、しかも成田は薄曇程度の好天でした。

飛行機を降りた瞬間、日本の夏特有の生暖かく湿り気を含んだ空気が私を出迎えると同時に、旅の終わりを教えてくれました。



入国審査や税関を通過し、お客様とお別れしたあと、夕方の込み合う到着ロビーで、無事にツアーが終了した安堵感からか、しばらく放心状態のまま一人佇んでいました。

圧倒的大自然の迫力と、その中で自分の存在があまりにもちっぽけなものである実感。
お客様の感動された笑顔に立ち会うことの出来た喜び。
この旅は、また私に様々なものを与えてくれました。

アラスカの大自然に、そしてこの素晴らしい旅の機会を与えて下さった沢山の皆様に、感謝です。

そして私は既に、またいつかアラスカの地を訪れたい、お客様に紹介してみたいと思っています。
いつかまたそんな機会が来ることを願っています。